

新冠にまつわるお話しを集めた 新冠百話

第四十六話

「古川アシンノカル」

明治、大正の新冠に功績を残したアイヌ民族

(要約文)

明治から大正時代にかけての新冠に、幾多の功績や逸話を残した「古川アシンノカル」というアイヌ民族がいました。

古川は、安政四年（一八五七）に現在の新ひだか町静内に生を受けます。十六歳の時、開拓使によって開設された「御料牧場」に奉職します。この牧場は、優秀な軍馬や農耕馬を大規模に飼育していた牧場です。牧場が開設して間もない頃は、運営の中枢が新冠村の去童（さるわらべ）（現在の朝日付近）にありましたが、後に静内の御園に移転することとなります。その指導を行ったのは、開拓使雇いの外国人「エドウィン・ダン」ですが、最初に移すことを進言したのが、新冠と静内の地域性を熟知した古川ではないかといわれています。その後、御料牧場に籍を置きながら新冠村の奥にある滑若（現在の泉付近）に入地し、自分の牧場を持つことを許されています。これは御料牧場での働きぶりが認められての「特例」でした。明治二十九年（一九〇六）、古川牧場の馬「若月号」が札幌で行われた北海道物産共進会で見事一等賞を獲得しています。この時、すでにサラブレッド種を導入していたことから、日高地方における

軽種馬生産の先駆者的役割を担ってきたともいえます。

古川は教育にも力を注いだ人物でした。アイヌの子どもたちにより良い教育をほどこすため、私費を投じて学校を設置したのです。この学校はやがて教員が不足したために閉校しますが、その後、当時北海道で推進していた「アイヌ学校」の建物として利用されました。

事業者として、そして功労者としてふるさとの一時代を築いた古川アシンノカル。住まいは豪華絢爛で、地域の人からは「古川御殿」といわれたそうです。生活ぶりも一般の村人とは一線を画し、豪快そのものだったといえます。そうしたアシンノカルも老いには勝てず、大正十五年（一九二六）に波瀾万丈の人生を七十二歳で終えています。忘れることのできない「ふるさとの人」として、いつまでも語り継がれることを期待しています。



御料牧場職員の写真（明治 27 年）
前列左端の人物が古川アシンノカル

夏の交通安全運動（7/13～7/22）実施中

- 飲酒運転の根絶
 - バイク・自動車の交通事故防止
 - スピードダウンと全席シートベルト着用
 - 子供と高齢者の交通事故防止
- 静内警察署

火災・救急出動状況 () かつこ内は前年同期

区分	火災件数	救急件数
5月	1件 (1件)	26件 (26件)
4年1～5月	5件 (2件)	142件 (128件)

交通事故発生状況 () かつこ内は前年同期

区分	発生件数	死者	傷者
5月	2件 (0件)	0人 (0人)	2人 (0人)
4年1～5月	4件 (3件)	0人 (1人)	6人 (2人)

人の
うごき

(5月末現在)

人口 5,207人 (前月比 +14人)
 男 2,567人 (前月比 +15人)
 女 2,640人 (前月比 -1人)
 世帯 2,760世帯 (前月比 +10世帯)

町公式ホームページ

町公式フェイスブック

